

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530623

研究課題名（和文）セルフヘルプグループリーダー支援およびその後継者育成方法の実証研究

研究課題名（英文）Practical Research on How Self-Help Groups Leaders could be Supported and How Successors could be Trained as a Deserved Leader.

研究代表者

中田 智恵海（NAKADA CHIEMI）

佛敎大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：80259473

研究成果の概要（和文）：

セルフヘルプグループ（以下 SHG）の援助の特性として認知されている接近容易性や即応性がリーダーを疲弊させ、スムーズな交代を困難にしている。後継者の育成にはメンバーのエンパワメントを語る中でリーダーが育っていく。そのためにはピアサポート研修が必要であることが明らかとなり、ピアサポート研修のテキストを作成、改善しつつ、研修を重ねて一定の成果を得た。

研究成果の概要（英文）：

Accessibility to helping and coping with the task are often pointed out to be the nature of Self-Help Groups. According to the interview research, however, the leaders are exhausted by those nature. On the other hand, a peer support and sharing emotions are main factors of development of SHG. So, the author wrote the textbook on how to do on peer support and practicing them to some leaders. As a result, some SHGs continue good activities to be the model.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学、社会福祉

キーワード：セルフヘルプグループ・エンパワメント・ピアサポート

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、SHG は社会的な承認を得るようになり、専門職も生きづらさを抱えるクラ

イメントに対して、SHG を紹介するようになってきた。

- (2) SHG が援助形態として、制度の狭間において社会サービスも得られず、孤立する生活困難を抱える人々に有効に機能することについては拙著『セルフヘルプグループ』（2000）に示した。
- (3) SHG は援助専門職者が活用できる社会資源であり、生活課題を抱える人々が SHG の活動を通して全人的な成長を遂げることも明らかにしてきた。
- (4) さらには、多様な SHG が地域社会に存在すれば理解しあい、支えあえる援助のネットワークが構築される。
- (5) その一方でクライアントにとって必要な SHG が容易につぶれるようになってきた。SHG がメンバーのニーズを充足しなければ一旦は潰れても、必要な SHG であれば次に新たな SHG が立ちあがるだろう。しかし、メンバーのニーズを充足していながら潰れるのである。
- (6) こうした事態に対して（特）ひょうごセルフヘルプ支援センター（申請者代表）が平成 15 年～16 年に問題解決のための SHG のリーダー交流会を実施して発言内容を分析している。それによると、SHG が潰れるのはひとえにリーダーのバーンアウトによるものであった。リーダーが交代したいと願っても後継者が育っていない、メンバーの希望とは関わりなく、リーダーの地位を設立以来ずっと同じ人物が務めている、などの問題も浮き彫りになった。
- (7) 次いで、SHG 内での内部葛藤である。共通する生活困難を抱えるメンバーが常に一体感をもって活動するわけではなく、時には仲間同士の生活困難の比較やはしご状差別なども生じる。この内部葛藤は一般社会では受け入れられないと認識した人々がもう一つのオプションとして SHG を安心安全の居場所とみなす人々にとって居場所を無くす結果ともなる。
- (8) こうした SHG が継続的に長期的に活動を継続できるように SHG 支援することはひとえにリーダー支援であり、後継者の育成にある。リーダーは卓越した資質をもっていることが多く、それだけの資質を有する人材が続くわけではない。創設者ほどの卓越したリーダーシップを持たないメンバーだけの SHG では、たちまち後継者不在となってしまう。
- (9) リーダー支援のために援助専門職者が介入した場合に支援の有り方や方向性を間違えて逆にリーダーの依存性を触発し SHG を潰すことにもなる。
- (10) セルフヘルプ支援センターではこの後継者育成の役割を担って SHG をサポートしようとしている。そのためのリーダー研修としてピアサポートや交流会を開催し、リーダー同士の出会いの場、情報交換の場を設定している。リーダーはそれぞれ困難を抱えつつ活動しているが、出会ってみると共通する困難を抱えていることを知って自分一人ではなかった、とこころでもまた、SHG を経験する。つまり、セルフヘルプ支援センターはリーダーの SHG の場となるものといえよう。
- (11) このように、SHG が必ずしも理想的な援助形態として機能するわけではなく、最後の砦ともなるはずの SHG が時にはさらなる危機に陥れる場合すらあることも明らかになった。こうした両極端の SHG が本来の機能を損なうことなく、社会資源として機能するように支援の有り方を明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

- (1) SHG が援助形態として有効であることが周知され、専門職からも紹介されるようになってきた一方で、メンバーのニーズを充足していると思われる SHG が実際には脆弱な組織で容易に潰れる危険性がある。こうした SHG の援助形態としての有効性を減ずることなく、支援する方法を明らかにすること
- (2) SHG のリーダーの支援の有り方やリーダーの後継者を育成する方法を種々模索して一定程度、明らかにして実践する。
- (3) SHG を支援する機関としてセルフヘルプ支援センターがあり、このセルフヘルプ支援センターが開催するピアサポート研修やリーダー交流会の開催がどこまで SHG 支援、リーダー支援に有効であるかどうかを検討する。

3. 研究の方法

- (1) 初年度はまた、身体やこころに障害のある人たち、依存や嗜癖のあるひとたち、発達障害を持つ人たちなどの本人の会 6 団体と不登校や引きこもりの人たちの親の 1 団体のリーダーと半構造化面接を実施してグラウンデッドセオリーに基づい

て分析し、リーダー支援として研修と交流会を実施して、その成果について検討した。

- (2) 次年度は後継者育成方法を明らかにする試みとして精神障害、発達障害、身体障害のリーダー4人との半構造化面接を実施した。さらに29名の多様なSHGのリーダー交流会を実施して前記4人の面接結果の検証を行った。
以上のSHGのリーダーとの60分～90分の半構造化面接をICレコーダーに録音し、テープ起こしをしてグラウンディッドセオリーアプローチによって分析した。

- (3) 最終年度は前2年間の研究結果に基づいて、ピアサポート研修を毎月、継続的に実施してリーダーのエンパワメントを踏った。ピアサポートのテキストは都度改善しつつ、各SHGにあったピアサポート研修を実践しようとした。

4. 研究成果

以下の点が明らかとなった。

- (1) SHGの援助の特性とみなされてきた即応性や接近容易性は逆にリーダーを疲弊させ、SHGが潰れる要因となることが明らかとなった。体験的知識の交換も下手をすればリーダーによっては新参のメンバーに自己の体験を押し付ける結果になってしまうことも少なくないことが明らかとなった。
SHGの援助の特性と考えられることも提供の仕方や伝え方によっては、生活困難を抱える人にとっては単なる古参者からの押し付けに終わってしまいかねない。このような場合のSHG支援にはリーダー支援と後継者の育成のためにピアサポート研修を実施する必要がある。このことによって、リーダーならびにメンバーのエンパワメントを達成し、SHGの継続のためのリーダー後継者の育成を図ることができる。
- (2) 孤立する人が情報や具体的な対処方法や思いの分かち合いを求めてつながり、SHGとなる。次いでさらに多くのメンバーとつながりを持ち、一般社会へとつながりが広がっていく。社会でつながりながら、もう一つの生きる場としてのオプションとなる。
- (3) 社会での生活の場を求めにくい障害や病気を抱える人々は地域社会での生活の場を求めてSHGが運営主体となってニーズを充足する事業所を設立するに至る。

- (4) 各SHGのメンバーが生きづらいのは、本人たちの抱える課題に対して、時には家族からでさえも理解されず、ましてや一般市民からも理解を得られないことに起因することが明確になった。例えば、発達障害や高次脳機能障害は他者からは分かりにくい障害ではあるために、本人はさらに苦しくことになる。しかし、ひとたび市民や家族からも理解されれば、本人の生きづらさの多くは改善する。したがってSHGは生きづらさへの理解を求めて社会に対して啓発活動を実施する。SHGではより多くの人々に自分たちの生活困難を分かってもらいたい、と望んでいる。まずは自分たちで理解しあい、家族へと広がり、さらには社会一般への広がると、生きる場が拡大する。そしてようやく、地域社会で当たり前になることが実現する。

- (5) SHGの規模が大きくなると、SHGの基本である分かち合いが沈滞し、SHGの規模が小さいと分かち合いが活発になる。

- (6) SHGの規模が大きくなるとメンバーのニーズを充足するために事業を運営するようになる。この事業の運営のためには組織を堅固にする必要がある。

- (7) SHGは当事者だけの場であるから、その形成は自分たち当事者の中でも能力のあるものがつくるものであり、この条件が整って初めてSHGSHGとして機能する。SHGのリーダーは動機が明確であり、その活動を通してエンパワメントするが、元々、学習能力が高く組織作りには有能な人材であることが求められる。

- (8) 元々、能力の高い人々をリーダーとするSHGがボランティアで継続させるということは難しいのではないかと。リーダーには何らかの報酬が付与されるべきではないか。海外のセルフヘルプ支援センターは有給の職員が仕事として担っている。有給のスタッフとなるかどうかは新たな問いとして明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

中田智恵海 セルフヘルプグループの課題と支援のあり方、日本コミュニティ心理学会
2010年7月17日 上智大学

中田智恵海 セルフヘルプグループの挑戦
第4回世界コミュニティ心理学会 2012年6月21日～23日（ポスター）バルセロナ大学

〔図書〕（計5件）

中田智恵海 ひょうごセルフヘルプ支援センター 『セルフヘルプグループの魅力』
2010年 88頁

中田智恵海 つむぎ出版 『セルフヘルプグループ—自己再生を志向する援助形態』2009年 211頁

中田智恵海 ひょうごセルフヘルプ支援センター 『ピアサポート研修 テキスト』
2010年 20頁

中田智恵海 編 ひょうごセルフヘルプ支援センター 『ひょうごのセルフヘルプグループ』（兵庫県内のSHG一覧：278団体掲載）

中田智恵海 他ミネルヴァ書房『福祉とは何だろう』『当事者活動と社会福祉実践の展開とは』pp.191-207

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中田智恵海 (NAKADA CHIEMI)
佛教大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：80259473

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：